

論文 (Article)

生命をテーマとした石彫制作の研究

——『大地の種 -'11』の制作から——

The Study of Stone Sculptures with
the Theme of “Life”
— From the works titled
“Seeds from the earth -'11” —

藤田 雅也
Masaya Fujita*

1. 研究概要

筆者は、15年前から石が持つ素材の魅力や特性を活かしながら、自らの思いを作品として表現することを研究している。石は、耐久性や耐候性に最も優れた自然素材であり、何千年の時を経てもなお元の形を留めるものもある。山本学治は、土や木などの他の自然素材が持っていない石の物理的な諸性質として「重量（密度）・硬さ・耐久性」を挙げており、「岩石の生成過程における時間の長さや条件の苛烈さから生まれた、安定した存在の質の現われなのである」と述べている¹⁾。石という素材に秘められた強靱なエネルギーや生命感は、「安定した存在の質」や「石の持っている不変的な硬さと重さ」²⁾ゆえに感じられる性質であり、呪術的な恐れや憧れに似た感覚さえも抱くことがある。

筆者の石彫制作は、石との対話から始まる。石と向き合うにつれて、石にもそれぞれに個性があり表情があることを実感する。石と対峙するうちに自分自身がふと無心になっていることに気づき、そうした時間の中でイメージが広がっていく。石の中に潜むかたちや石の中に宿るものを内から外へと解放することが筆者の表現行為であり、作品制作の根底には「生命」や「誕生」といったテーマ性を一貫して持ち続けている。筆者は、石を大地からの産物であると捉え、これまでに『大地から』、『大地の芽』、『大地の種』といった作品のシリーズを数多く制作し発表している。本稿では、筆者の素材に対する思いや制作意図について触れながら、生命をテーマとした石彫作品『大地の種 -'11』の制作および作品発表について報告し今後の研究の方向性を明らかにしたい。

2. 生命をテーマとした石彫制作について

本研究で使用した錆ゴロタ石は、インドで採石されたものであり、表面が濃い赤茶色（錆色）をした直径約10cmから20cm程の玉石である（図1）。表面から約5mm程度の厚みの部分は、錆色をした硬い砂のような層になっているが、その内側は、深緑色

をした花崗岩であることが多い。一般的にゴロタ石³⁾は、建築資材やガーデニング用の石材、縁石などに使用されることが多く、筆者が知る限りでは彫刻素材として扱われた例はない。筆者にとっては、錆ゴロタ石の形態は大地から生まれ出てきた卵や種をイメージさせるものであり、この素材との出会いによって作品の構想は大きく広がっていった。

筆者の作品における発想のきっかけは、自然物や風景との出会いから生まれることが多い。これは、子どもの頃からの外遊びやふとした発見が影響していると思われるが、山で見つける木の実や種、海で拾った小石や貝などを集めては、その自然物にかけがえのない存在感を抱いていた記憶がある。これまでも「芽」や「種」、「実」などの生命的なモチーフを抽象形体に置き換えた石彫作品を数多く制作してきたが、現在に至るまでにはさまざまな彫刻家の作品や思想から多くの影響を受けてきた。

2001年にパークアリーナ小牧（愛知県小牧市）開館記念展として展示された加藤邦彦⁴⁾の「生き物」と題された約10点の石彫作品からは、植物的なフォルムの美しさと内在する生命の神秘に感銘を覚え、生命をテーマとした表現を展開していく上で大きな影響を受けた。また、20世紀を代表するイギリスの彫刻家ヘンリー・ムーアは「私にとって、作品とはまず第一にそれ自体の生命力をもっていなければならない。（中略）作品とは、それが表しているであろう対象を離れて、それ自体のうちに籠もっている活力とそれ自体の強力な命を持ち得るということを言いたいのである」と述べ、自らの表現は「生の意義を表現するもの」であり、「生きることにけるより大きな努力への刺激となるものである」としている⁵⁾。ハーバート・リード⁶⁾は、近代彫刻の展開を語る上で「生命主義」という言葉を好んで使用しているが、その際にはムーアの言明をたびたび引用し、彫刻芸術の世界的規模の展開を率先してきた彫刻家であると高く評価している⁷⁾。生命と自らの表現を一体として捉えたムーアの力強い生命観と精神性、量塊に対する探求心から学ぶことは多い。

自然形態に見られる論理性について山本が「自然物の形態はつねに、その物の、その時その場における存在の性質の誤ることのない形象化である」⁸⁾と述べているとおり、自然石である錆ゴロタ石は採石された時や場所によってその形や大きさがひとつひとつ異なっている。それぞれの石の形状に合わせて加工し研磨する行為はまさに石との対話であり、本研究では内と外の関係性を意識しながら錆ゴロタ石に内在される生命の形を具現化させていった。彫刻家イサム・ノグチは「あらゆる石の根は地下で合一している」⁹⁾と述べており、自然至上的理念をひとつの背景としながら制作を展開させてきた。「内在する形」をイメージすることは、生命をテーマとした石彫制作においてはとても重要な行為であり、本作品においても内包される新たな生命を常に意識しながら制作を行った（図2）。

3. 作品発表

実際には100個以上の錆ゴロタ石を加工し研磨したが、個々の錆ゴロタ石の配置や作品全体の空間構成を検討した結果、横列に12個、縦列に8個、計96個の配列に至った。しかし、形状や大きさが異なる錆ゴロタ石のみを96個配置すると、全体として緊張感に欠ける構成になったため、厚み6mm、一辺240mmの正方形の鉄板を等間隔に敷くことによって空間の均衡を図り、統一感のある構成を成立させることを試みた。¹⁰⁾

石と鉄板の組み合わせによる彫刻作品を数多く発表している李禹煥は石と鉄による「存在のズレを感じるところから、表現行為ははじまる」¹¹⁾と述べ、「鉄板と石の出会いの可能性」¹²⁾を求めてさまざまな表現を模索しながら展開している。石と鉄にはどちらにも共通した「物質の存在感」がある。しかし一方で、石が自然を意味するとすれば、鉄は人工を意味するように相対する素材として捉えることもできる。李は、鉄の持つ人工物としての性質を生かすために黒く塗装された無機質とも感じられる鉄板を用いることが多いが、筆者は鉄を雨水にさらすことで風化させ、錆ゴロタ石と鉄板の風合いを調和させることを試みた。鉄板は、一度全体を錆びさせた後に表面の錆を落とし、その上から薄墨を塗布したため、1枚1枚の色合いが微妙に異なりながらも全体的には落ち着いた茶褐色に仕上がった(図3、4)。

本作品を東京・国立新美術館にて開催された第66回行動展(主催:行動美術協会¹³⁾、2011年9月14日～26日)に出品した(図5)。また本作品は、会員による審査の結果「行動美術賞」を受賞し、地方巡回展(大阪展:10月12日～16日/大阪市立美術館、京都展:11月8日～13日/京都市美術館)にも展示された。

4. 考察と今後の展望

錆ゴロタ石には黒御影石や大理石などとは異なった、個体としての素材の存在感がある。前述したように錆ゴロタ石は、建築資材やガーデニング用の石材として使用されることが多く、筆者が知る限りこれまでに彫刻素材として扱われた例はない。本作品を発表したことによって、はじめて錆ゴロタ石という素材を知った彫刻家や来場者も多かったようである。筆者は、黒御影石を石彫制作の素材として扱うことが多いが、本作品の制作と発表を通して、さまざまな種類の石材に目を向けることも素材研究を行う上ではとても重要であると実感することができた。

今後は、生命をテーマとした石彫制作の研究をさらに発展させていくためにも、国内外のさまざまな種類の石材を調査・研究し、素材の特性や表現の可能性を追究していきたい。

5. おわりに

筆者は、これまでに石を素材とした制作活動を幅広く展開してきたものの、その成果は展覧会での作品発表に留まっていた。展覧会場においては、鑑賞者それぞれの見方や感じ方によって作品を鑑賞してもらえればよいのであるが、鑑賞者に対して作家自身が作品に込めた思いや制作過程を解説することによって、鑑賞者がより深く作品を理解するきっかけになり得ることを近年実感することが多い。本稿では、筆者の素材に対する思いや制作意図、作品発表の報告について概要をまとめ、今後の石彫制作の研究における展開を明らかとしたが、古代から現代に至るまでの長い歴史の中における本研究の位置づけや先行研究との関係性についての検証や考察が不充分であることは課題である。今後は、筆者がこれまでに作家や作品、文献などから受けてきたさまざまな影響を、無意識の中で処理してきた感覚的思考として捉え、研究の位置づけや先行研究との関係性についての視点を明確にしながら研究を深めていきたい。

■註

- 1) 山本学治、『素材と造形の歴史』、鹿島出版会、2005年、p.38
- 2) 同上、p.42
- 3) ゴロタ石（吾朗太石）とは、特定の鉱物や鉱石としての地質学上の正式な名称ではなく、ゴロゴロとした石の形状に由来して付いた名称であると言われており、道にころがっている丸い石や石ころも含めて、広い範囲の石がゴロタ石として捉えられている。国内では、伊勢ゴロタ（三重県）や木曽石ゴロタ（岐阜県）、美濃石ゴロタ（岐阜県）、揖斐石ゴロタ（岐阜県）などが代表的である。海外から輸入されるゴロタ石も多く、錆ゴロタ石（インド）や真黒石ゴロタ（インドネシア）、真黒錆ゴロタ（インドネシア）などがある。
- 4) 小牧市出身の彫刻家。1945年生まれ。ドイツにて無所属の彫刻家として活動し、日本、ドイツ、フランス、スウェーデンなど数多くの国で展覧会を開催。（加藤邦彦・加藤温子『加藤邦彦 彫刻作品集-3』、1989年）
- 5) ハーバート・リード、『近代彫刻史』、1995年、p.161
- 6) サー・ハーバート・エドワード・リード（Sir Herbert Edward Read、1893-1968）は、戦後の日本の美術教育に大きな影響を与えたイギリスの美術評論家。詩人、文芸評論家、美術批評家でもある。人間の精神活動一切を包括する創造的活動の基礎は芸術的表現活動であるなどの考えを提唱している。
- 7) 前掲、『近代彫刻史』、pp.74-75,178-179
- 8) 前掲、『素材と造形の歴史』、p.18
- 9) イサム・ノグチ、『イサム・ノグチ ある彫刻家の世界』、美術出版社、1969年、p.48
- 10) 鉄板の厚みは3mm、6mm、9mm、12mm、一辺の長さについては200mm、250mm、300mmのものをそれぞれ用意し、錆ゴロタ石との関係性や配列した際の全体の空間構成について検討した。厚みは6mmとしたが、一辺の長さについては250mmでは少し大きく感じたため240mmとした。
- 11) 李禹煥、『余白の芸術』、みすず書房、2000年、p.168
- 12) 同上、p.169
- 13) 洋画、彫刻の美術団体。1945年に結成し、1946年に第1回展を開催。以来毎年秋に全国公募展を行い、1950年には建畠覚造ら4名を会員に迎え彫刻部が設けられた。（行動美術協会小史、『第66回行動展作品集』、行動美術協会、2011年、pp.111-140）



図1 錆ゴロタ石

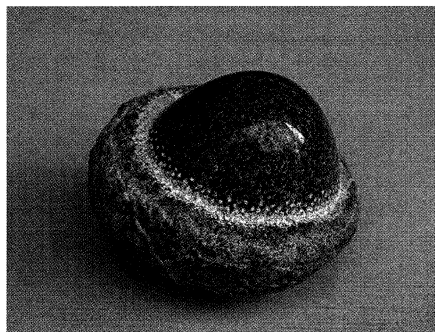


図2 作品『大地の種-'11』(部分)

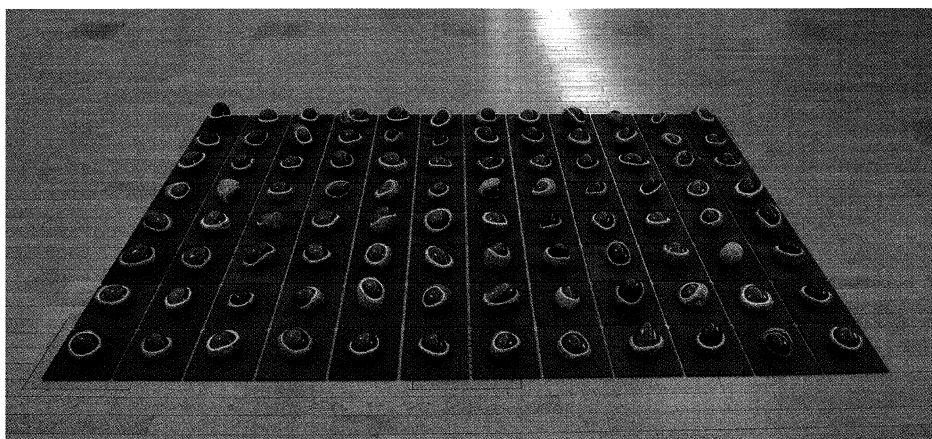


図3 作品『大地の種-'11』(全体図)

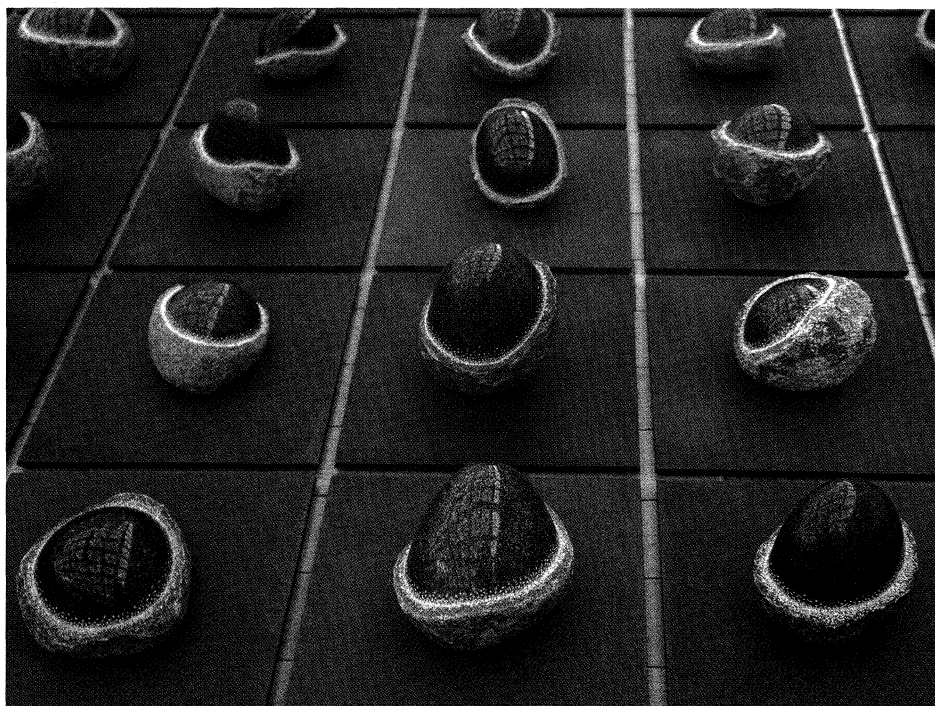


図4 作品『大地の種 -'11』(部分)

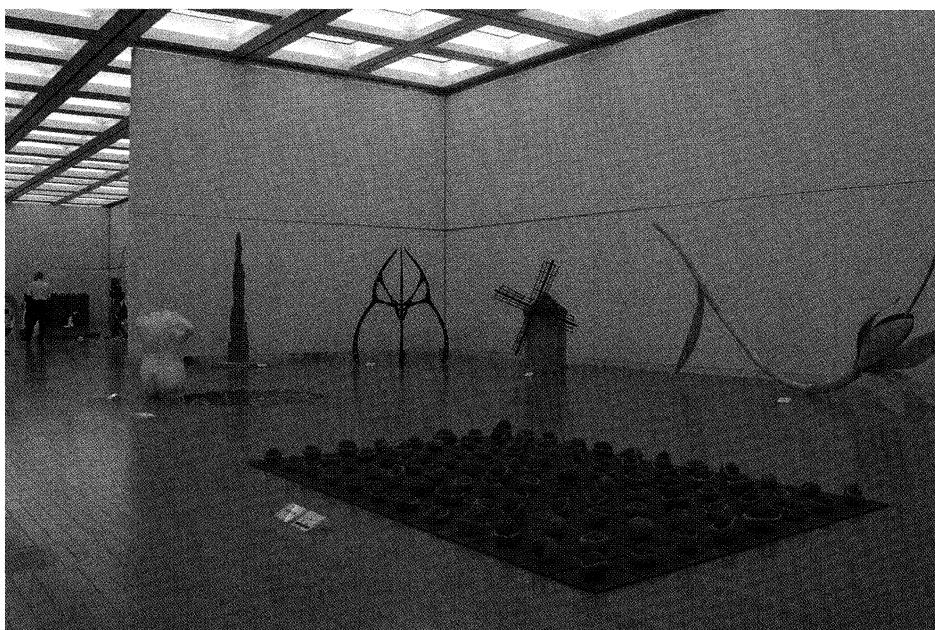


図5 国立新美術館での作品展示風景 (手前が本作品)